

乙 第 号

春田 祥治 学位請求論文

審 査 要 旨

奈 良 県 立 医 科 大 学

論文審査の要旨及び担当者

報告番号	乙 第 号	氏 名	春田 祥治
論文審査担当者	委員長	教 授	川口 昌彦
	委 員	教 授	田中 康仁
	委 員	教 授	小林 浩
	(指導教員)		

主論文

Sequential screening to predict symptomatic pulmonary thromboembolism
after gynecologic surgery in Nara, Japan

婦人科手術術後の症候性肺血栓塞栓症予防スクリーニングの有用性についての
検討

Haruta S, Kawaguchi R, Hirai T, Kobayashi H

International Journal of Gynecology and Obstetrics

第 132 卷 第 1 号 42-45 頁

2016 年 1 月発行

論文審査の要旨

肺血栓塞栓症は婦人科疾患周術期の致死的合併症である。肺血栓塞栓症の 80% 以上は、下肢や骨盤内の深部静脈血栓症に続発するとされている。そのため、奈良県立医科大学産科婦人科学教室では、婦人科疾患手術症例に対して「Programme for VTE Screening Study at Nara, Japan(PROVEN)」と称した、術前に静脈血栓塞栓症の陰性的中率が高い血漿 D-ダイマー値測定と、深部静脈血栓症の簡便でかつ精度が高い検出法である下肢静脈超音波検査からなる術前静脈血栓塞栓症スクリーニングを行ってきた。申請者は、PROVEN の術後症候性肺血栓塞栓症の発症予知における有効性について、前方視的に検討することを目的とした研究を行った。

本研究では、婦人科疾患に対する手術予定患者 1,729 例を対象として、術前に D-ダイマー値を測定し、D-ダイマー値が $1.0 \mu\text{g/mL}$ 以上であった症例に対して下肢静脈超音波検査を行い、深部静脈血栓症の有無に基づいた肺血栓塞栓症に対する周術期予防を実施した。その結果、6 例(0.35%)に術後症候性肺血栓塞栓症が発症した。更に、周術期予防として弾性ストッキングと間歇的空気圧迫法による理学的予防を中心に行った期間と、抗凝固療法を中心に行った期間を比較した結果、理学的予防を中心に行った期間の 929 例中 6 例に症候性肺血栓塞栓症の発症を認め、抗凝固療法を中心に行った期間の 800 例からの発症は 0 例であった。このことから、PROVEN による術前スクリーニング単独では術後早期の症候性肺血栓塞栓症発症の予知に有用ではないが、PROVEN とともに抗凝固療法を中心とした周術期予防を行うことで、術後症候性肺血栓塞栓症の発症を予防できることがわかった。

これまで、婦人科疾患の術後肺血栓塞栓症の予防法は確立していなかった。本論文は、術前スクリーニングPROVENと共に周術期抗凝固療法を積極的に行うことで、術後症候性肺血栓塞栓症を撲滅できる可能性を示しており、婦人科領域の発展に寄与することから学位に相当すると考える。

参 考 論 文

1 婦人科悪性腫瘍における深部静脈血栓症(DVT)スクリーニングの検討

春田 祥治、山田 嘉彦、吉澤 頼子、金山 清二、吉田 昭三、
大井 豪一、小林 浩

Therapeutic Research 第29巻5号 680-682頁 2008年 発行

2 当科におけるエノキサパリンによる帝王切開術後肺血栓塞栓症予防

春田 祥治、佐道 俊幸、小川 憲二、河原 直紀、小池 奈月、金山 清
二、成瀬 勝彦、野口 武俊、川口 龍二、大井 豪一、小林 浩
心臓 第44巻7号 906-907頁 2012年 発刊

3 卵巣腫瘍手術後に静脈血栓塞栓症を発症した一例

春田 祥治、川口 龍二、小池 奈月、大井 豪一、小林 浩

日本産婦人科・新生児血液学会誌 第24巻1号 8-9頁 2014年 発刊

以上、主論文に報告された研究成績は、参考論文とともに婦人科の進歩に寄与するところが大きいと認める。

平成 28 年 3 月 8 日

学位審査委員長

侵襲制御・生体管理医学

教 授 川口 昌彦

学位審査委員

運動器再建医学

教 授 田中 康仁

学位審査委員（指導教員）

女性生殖器病態制御医学

教 授 小林 浩